

乳幼児アトピー性皮膚炎における食物アレルギーの関与の実態についての研究

伊藤 節子

要約：アトピー性皮膚炎を主訴として小児科アレルギー外来を受診した6才未満の乳幼児118名について、卵白、牛乳、大豆、ダニに対する特異IgE抗体を測定し、食物アレルギーの関与の実態について検討した。その結果、食物アレルギーがアトピー性皮膚炎の症状の修飾に関与するのは乳児期および幼児期早期にみられる特有の現象であり、年長児になるに従い、ダニアレルギーあるいはその他の非特異的因子の関与する割合が高くなることが明らかとなった。

見出し語：乳幼児アトピー性皮膚炎，食物アレルギー，ダニアレルギー

（目的）アトピー性皮膚炎を主訴として、昭和63年11月より平成元年1月までの3カ月間に、医仁会武田総合病院および京大小児科アレルギー外来にてアレルギー検査をうけた6才未満の乳幼児全例を対象として、本症における食物アレルギーの関与の実態を調査した。その年齢分布は、0才児64名、1才児32名、2才児5名、3才児8名、4才児4名、5才児5名の計118名であった。得られたデータは、0才児64名、1才児32名、2才児以上22名の3群に分けて解析することにした。

（方法）この118名に対し、卵白、牛乳、大豆、ダニに対する特異IgE抗体をスクラッチテストおよびRAST法にて測定した。今回の検討では、ス

クラッチテストでは膨疹の径10mm以上、RAST法ではスコア2以上を陽性とした。皮膚症状の消長に対する食物アレルギーの関与については、卵白、牛乳、大豆について観察した。いずれかのアレルギー除去により皮膚症状が消失ないし改善し、再摂取により皮膚症状が再出現した場合を「食物アレルギーの関与したアトピー性皮膚炎」と定義した。

（結果）臨床的に「食物アレルギーの関与したアトピー性皮膚炎」と診断できたのは、0才児では96.8%、1才児では90.6%であり、2才児以上の群40.9%に比べて有意に高い割合を占めていた（図1）。0才児では原因と考えられるアレルギー

に対する特異 IgE 抗体が見つかったのは、臨床的に食物アレルギーと診断された62例中61例、全体の95.3%であった。この高い一致率は、アレルギー特異 IgE 抗体の証明が、0才児においては食物アレルギーの診断に極めて有用であることを示唆している。これに対して、1才児、2才児以上の群では、年令とともにその一致率は低下してきている。特に2才児以上の群では、検査上陽性であったアレルギーを含む食品を摂取しても症状がでない例が増加していた。陽性アレルギーの内容も図2に示すように0才児、1才児と2才児以上の群では大きく異なっていた。0才児と1才児では卵アレルギーの証明される例が多く、卵白特異 IgE 抗体が陽性であったものは、両群とも93.8%で、2才児以上の群の陽性率59.1%に比べて有意に高い割合を示した。牛乳に対する RAST 陽性率は年令による差が少なく、いずれも30%前後であった。大豆に対する RAST 陽性率は、卵とは逆に年令とともに高くなる傾向があり、しかも大豆 RAST 陽性例はいずれも卵白 RAST 陽性であった。吸入抗原の代表であるダニ RAST 陽性者は0才児で64例中2例、3.1%、1才児では32例中8例、25.0%、2才児以上では22例中16例、72.7%と、0才児ではほとんどの例で陰性であるのに、成長とともに陽性者が増え、2才児以上では約3/4の例で陽性となっていた。これらの年令的特徴は症状改善のために必要な治療の選択にも反映されていた(図3)。0才児では、64例中62例(96.8%)に食物アレルギーの関与がみられたので、この62例全例に原因となるアレルギーの除去食療法を行い、このうち効果の不十分だった14例に経口 DSCG を併用、既にダニアレルギーの関与がみられた1例にはケ

トチフェンを併用することにより症状の軽快がみられた。1才児でもアレルギー除去食は32例中29例、90.6%で有効であり、このうち8例に経口 DSCG を、1例にケトチフェンを併用した。食餌療法の適応のなかった3例中2例ではスキンケアと環境整備のみで十分な効果が得られたが、残りの1例ではケトチフェンの併用を必要とした。2才児以上の群では様相が大きく変わり、除去食が有効であったのは22例中9例、40.9%のみで、しかも9例中8例では経口 DSCG、あるいはケトチフェンの併用が必要であった。残りの13例では、スキンケアと環境整備が有効で、そのうち5例ではケトチフェンを併用した。

(考察) アトピー性皮膚炎児において、0才児、1才児では食物アレルギーの関与が臨床的にも検査上からも示唆される例が大半を占めるのに対し、2才以上の群では食物アレルギーが関与していると考えられる例が半数以下となることが明らかとなり、しかも3/4の症例でダニアレルギーが成立していた。食物アレルギーがアトピー性皮膚炎の症状の修飾に関与するのは乳児期および幼児期早期にみられる特有の現象であり、年長児になるに従い、ダニアレルギーあるいはその他の非特異的因子の関与する割合が高くなると考える。アレルギー除去食はそのアレルギーの関与が臨床的にも検査上からも証明された場合に限り、年令因子と家庭的および社会的要因を考慮の上実施すべきであり、適切な薬物療法の併用も患者および家族の quality of life の向上に有用であると考えられる。

図 1

アトピー性皮膚炎と食物アレルギー

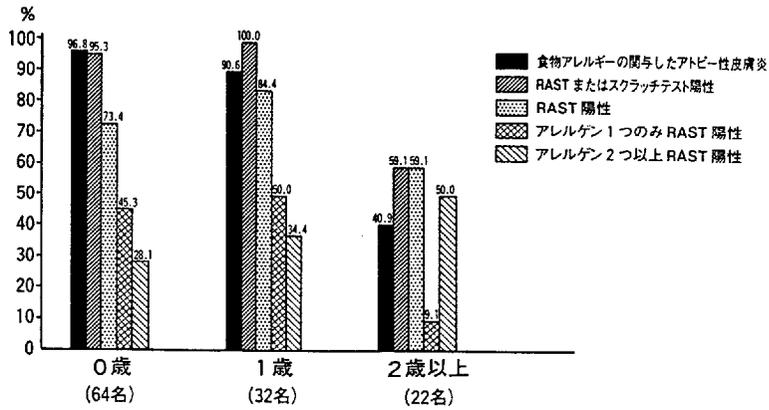


図 2

アトピー性皮膚炎児におけるアレルギー特異 IgE 抗体

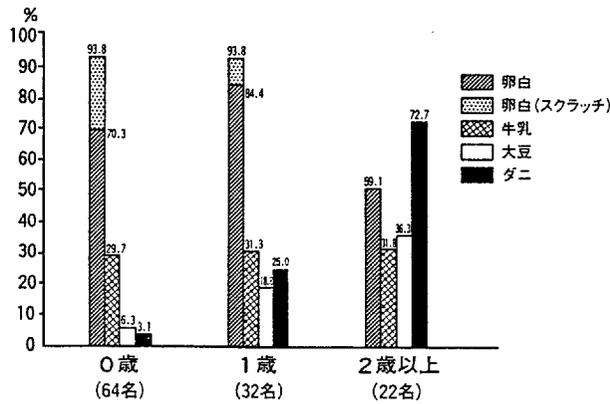
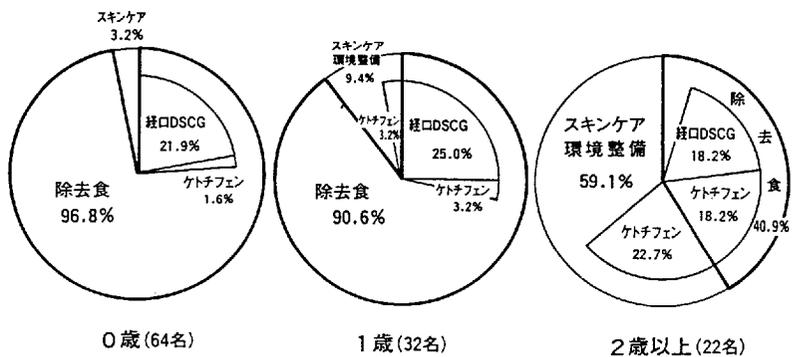


図 3

アトピー性皮膚炎児の治療





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:アトピー性皮膚炎を主訴として小児科アレルギー外来を受診した 6 才未満の乳幼児 118 名について、卵白、牛乳、大豆、ダニに対する特異 IgE 抗体を測定し、食物アレルギーの関与の実態について検討した。その結果、食物アレルギーがアトピー性皮膚炎の症状の修飾に関与するのは乳児期および幼児期早期にみられる特有の現象であり、年長児になるに従い、ダニアレルギーあるいはその他の非特異的因子の関与する割合が高くなることが明らかとなった。